

〈紹介〉

# 『解放教育著作集 全三巻』

中村 抔三 著

明治図書刊

鈴木 祥 蔵

はじめに ——人とその仕事と——

現在大阪市立教育研究所員であり、全国解放教育研究会事務局長である著者の過去20年間に及ぶ諸論を3つに区分してまとめたのが、この中村抔三著作集全3巻である。

第1巻は『部落解放と教育実践』で、中荘小学校における実践から明德小学校における実践までの、著者のいわば教師生活の出発から“つまずき”をへて、次第に解放運動と結合した教育運動とは何かを明らかにしてきた理論上の発展が、どちらかという、生活綴方的発想とその実践の質を残しつつまとめられた、貴重な文書が集められている。

第2巻は『解放教育と子ども会活動』であって、第1巻の諸論にみられる「学校」における実践と重なりあいながら、部落子ども会という学校外の子どもたちの集団が解放同盟のたたかいに支えられ指導され励まされながら、あるいは逆に部落解放同盟の支部活動を活発にしてゆく力となりながら育てゆく、その道筋を明かにした諸論文が集められている。教育における「集団主義」の生きた伝統を保持しかつ発展させつつあるのは、地域における子ども会であって、学校が子ども会をもたず、子ども会を無視しては「解放の教育」に至りつくことができないのではないか、という著者の思想が美事に展開されている。

第3巻は『解放教育と集団主義』であり、第1巻、第2巻の総合としての、部落解放の立場に立った解放教育の理論と実践に関する諸問題が論じられ展開されている。

著者、中村抔三氏は、1922年に長野県に生まれ、42年（昭・17）に長野師範学校を卒業し、直ちに学徒出陣して海軍予備士官となり、敗戦後、社団法人・農山漁村文化会長野支部で活動した。聞く

ところによれば、その頃長野におった大阪市大教授の原田伴彦さん（現在部落解放研究所長）や、名古屋大学の竹内良知さんなどと接触があり、松本市を舞台に民主運動を展開していたということである。やがて松本を去って京都へ来て社団法人・部落問題研究所に入所し、研究所員になり、その頃に京大の経済学部で顔を出しながら経済学的な、あるいは社会の“土台”から物を見る見方を学びとった。やがて、教育実践に乗り出し、戦後の教育実践を奈良県の中荘小学校ではじめた。奈良県では松浦勇太郎氏をはじめとする多くの先輩たちから、生きた部落問題に踏み込んでゆくきっかけを与えられた。その後京都へ移り、やがて、「子どもの会の組織を発展させることを任務として与えられて」大阪へ移り、大阪市立教育研究所に籍をおき、かたわら全国解放教育研究会の組織にかかわり、その事務局長として活躍し現在に至っている。その間25年、中村抔三著作集3巻に収められた原稿が、その枚数にして5000枚をはるかに突破している。

彼はこの25年の間に、この全3巻の著作集に収めきれなかったものを加えれば約7000枚になんなんとする原稿を書いたことになる。ということは、殆んど毎日1枚の原稿は必ず書いたということになる。彼は、現場で子どもたちに教育し、暇を見つけて、「子どもを背中におんぶして」傘をさしながらその短い着物を着て親の家を訪問し、あるときは父母たちと酒のみ歌を唱い、口論をし、たたかいに参加し、あるときは誤解され、あるときは“石をもて追われるごとく”職場を去らねばならなくなり、あるときは絶望し、あるときはさらに大きな希望に輝き、曲折しながらたどりついた彼の理論と実践が書かれてきたのである。

戦後のわが国において今日みられるように、部落解放運動が質量ともに発展するまでには幾多の困難な曲折があった。帝国主義日本、天皇のくに日本が崩れて、日本国憲法の発布にともなう民主主義体制への変化があり、労働組合がむしろ進駐中のアメリカの司令によって推奨される時期もあった。独占禁止法や持株統制委員会の活動が一方にあり、農地解放が行われて地主という勢力が瓦解してゆく時期がこれに重なっている。それは1950年まで続く。1950年、つまり昭和25年は朝鮮戦争の勃発した年である。

この時期からアメリカの対日政策は急速に変化してくる。レッドパージが強行され、共産党はあたかも非合法政党のように取扱われ、ソヴェトや中国などを除くくにぐにをアメリカがそそのかして対日講和をいそぎとり結んだ所謂片面講和がサンフランシスコで結ばれ、わがくに警察予備隊という名の軍隊がつくられる。そのようにして朝鮮戦争で全く韓国、アメリカの立場に立って協力関係を結ぶような役割を果させられる一方、その代りとして特需による経済的厚遇をもらいうけるというような、そのような状況をたくみに利用してわがくに独占資本が復活強化されて登場してくるのである。それが1955年である。

この年、著者である中村抃三氏は、部落問題研究所の専任研究員をやめて、奈良県吉野郡の中荘小学校に赴任した。「小・中学校の教師は、戦中戦後、信州ですこしやったことはあるが、当時は教育にそれほど意欲的に取り組んだわけでもなかった。部落問題についての関心があったのでもない。だから、このときが、私の教師生活のほんとうの出発であったような気がする」と第1巻の解説に述べている。

中村氏の第1作といってもいい『教育調査の理論と展開』（潮文社）の「あとがき」に次のようなことが書かれている。

「わたくしは信州にそだった。そして師範学校を卒えると、信州の小学校に奉職し、そのかたわら極めて封建制の色こい山の村や、谷合の村々の調査、けいもうに従ってきた。こうした私にとって、1つの大きな転期をもたらしたものが京都にある、部落問題研究所に奉職したことである。私はそこで、とほうもない重大問題にぶつかってし

まった。それはあの貧しい谷合の村々に比すべくもない未解放部落の問題であり、とくに私をかって、奈良県の奥深い山村である中荘小学校に奉職させることになったのである。」

中村氏は、事実につづかって、その事実から極めて多くのことを学んでそれを自己の生き方を変化させる重大な契機にしている。何度も何度も、このようにして絶えず自己を変化させ、鍛えなおし、全体的に整理して前進するために自分の実践を記録として書きまとめ、その総括の上に立って新しい課題を追求した実践へと再出発する。このような繰返しは彼の大きな人間的成長を支えてきたのである。」

第2巻にまとめられた『部落子ども会』とのかかわりにもそのことはいえる。京都の養正小学校の校区に住む子どもたちの「田中子ども会」との出会いを通じて、中村氏は、部落子ども会が戦前の「新教」「教労」との深いつながりのあることにおどろき、そこから、戦前のピオネール運動の資料の発掘にとりかかる。そして、それと並行して、自らは東三条の子ども会組織にかかる。学校の実践——つまり教室における実践の方向がはっきりと定まらない原因は何かということも、実践的にたしかめてゆくそのたしかさが、中村理論のたしかさを生みだす秘密なのである。

著者中村抃三氏の理論と実践の成長と発展の背景には、2つの運動が重なりながら影響を与えている。1つはわがくに戦後の教育をめぐる民間教育団体や教育運動の全体のうごきと発展である。他の1つは、部落解放運動の成長と発展である。この2つが彼の理論と実践の発展にからまりあっているから、彼のこの3巻の著作集の重量がどしりと重く感じられてくるのである。このことは逆にいえば、教育実践という概念を教室（20坪のとよくいわれる）の中に閉ちこめることになれた人びとには、彼の実践記録や彼の諸論の意味がわからないということになるのである。

以上のようなことを前提として、その理論と実践の発展を私なりに学びとり整理して、読者の便に供しようと思うものである。

## 1. 教育実践とヒューマニズム ——第1巻——

第1巻『部落解放と教育実践』は「中荘小学校

における実践」「河合小学校における実践」「有  
濟小学校における実践」「明徳小学校における実  
践」の4つの論稿からなっている。中荘小学校は  
奈良県吉野郡の小学校であり、その実践は1955年  
（昭・30）11月にはじまっている。「中荘村には  
部落はなかった」。そこでの実践の基調になるも  
の、彼の教育理論の中心にすえられたものは、生  
活綴方から学びとったものであった。

その中荘小学校の実践には「学級革命」の小西  
先生、「山びこ学校」の無着先生、「恵那の子ど  
も」の多くの先生、「職場の民主化」「父兄との提  
携」「教育の科学化」「憲法の擁護」「基礎学力」  
「山芋」の大関松三郎などということばが一ぱい  
でてくる。

著者に私は直接たしかめたわけではないので、  
あるいは間違っているのかも知れないが、吉野の  
中荘へゆくまでの著者が、京都の部落問題研究所  
の研究者として生活しながら、おそらく強烈な印  
象をうけたものに2つあったような気がするの  
である。1つは国分一太郎氏の『生活綴方ノート』  
に代表される一連の生活綴方的な立場に立った実  
践報告や作品集によって強く動かされたこと、第  
2のものは、毛沢東の思想による影響である。こ  
の2つの立場が結合されて、生活綴方的教育方法  
によって子どもに日記をかかせたり、綴方を書か  
せたり詩をかかせる一方で、その仕事と労働とを  
結合させようとする。

N子の変化と働くことという節をもうけて、N  
子の変化の素地づくりの大切さを指摘し、その素  
地からさらに人間関係や自然現象をより深く広く  
知ろうとする能動的な力を「教材」にもとめてゆ  
く実践が、当をうれば、たとえば、N子の詩のよ  
うに、結実してくる。N子の詩とは次のような詩  
である。

あせをかきながらむいていくにどいも。  
手のさきが赤くなるまでむいていく。  
なにも考えずに、いっしょうけんめいむいてい  
いく。  
2人でむいていけば早いけれど、  
1人でむくとおそくなる。  
日光がにどいもにおちても、  
いっしょうけんめいむいていく。  
しかし、著者はN子のこのような認識と意識で

は駄目だと評価する。生活綴方の教育方法による  
と、たとえば国分一太郎氏のように、「生きた生  
産的实践、社会的・政治的实践に、全面的に参与  
しない世代である」子どもたちの「認識の発達」  
には限界があるのはあたりまえなのである。だか  
ら「手かげんがいる」といって、それを子どもた  
ちの年齢の問題として「日常的生活経験のあれこ  
れを大切に」することで満足してしまっているの  
だろうか。これがその当時の著者中村氏の疑問の  
1つであった。しかし、その疑問を充分に解明す  
ることができなかった。

中村氏は中荘の実践にひき続いて、奈良県北葛  
城郡の河合小学校に移る。そこでも生活綴方的方  
法をしきりに使うのだが、河合小学校には部落の  
子どもたちが来ている。だから、きびしい差別の  
現実にとりまかされているわけであるが、その子  
どもたちに迫り切れない限界があると考えざるを得  
ない自分に気づくのである。

そして、河合小学校における著者自身の実践を  
きびしく評価して、次のようにいうのである。

「……部落差別によってひきさかれている子  
どもたちがかんたんに結び合えるはずはなかった。  
子どもの意識も、それほどたやすくかわるもの  
でもなかった。にもかかわらず差別事件はたたみか  
けるようにして次から次へとおこってきた。西穴  
闇をさして『しらみむら』というのである。『皮  
食って生きている』ともいうのである。しかも、  
これに対して私が的確に動かないものだから部落  
の子どもたちは、ついにストライキをもって私に  
対抗してくることになる。

私の、当時の教育の欠陥は、この差別事件とス  
トライキに集中的に表われている。差別事件につ  
いては、子どもたちの意識がまた低いことから、  
高くなるまで待たなくてはならない、という教育  
である。」親たちに著者の教育のやり方を説明  
し、——いわば工作をし——子どもたちのスト  
ライキを抑圧し、教室に復帰させてしまうので  
ある。著者は続けて次のように書いている。

「現に私は、このストライキをおしつぶし、こ  
れを『1つの契機』として『ここではじめて話し  
合える“自由な学級”というものが生れてきた』  
とし、ベッタをなくする運動に入っていくので  
ある。」

著者中村氏は自己の実践を美事に対象化し客観的に評価して、実践の弁証法的な性格を正確にあとづけている。「私はかねてから部落の子どもたちといっしょになりたいと願っていた。意欲をもやして取り組んだことをいまも思いだす。だが、私のすすめてきた教育は客観的には何であったのか。部落の子どもたちの要求をつぶし、差別に対する怒りをおさえ、そして部落外の子どもたちと手を結ばせていく。これはきさにことばどおりの同和教育といわなくてはならないだろう。

学校と教室のなかに実践をしぼって、そこからわずかに父母に訴えてゆき、その反応をたしかめながらまた教室の子どもたちの教育に部落解放の教育を環元してしまうというこの教育のスタイルの生みだす結果は「同和教育」そのものであり、けっして部落解放教育（それは中村氏の場合部落解放の運動の発展に支えられて明かにしてゆくものなのだが）ではない、というきびしい評価をせざるを得なかったというのである。誰が批判するでもない。しかし、当時の中村氏は自分の実践のなかに何となく満たされないものがあることにすどく気づいていながら、毎日の実践は当時の歴史的社会的な諸関係の総和として一定のギリギリの当時の実践として打ち出されざるを得なかったのである。そのことを実践的にジリジリと明らかにしながら前進するところに、中村氏の仕事の大変な重さを感じることができるのである。1959年（昭・34）京都の有斉小学校へ移り、1966年にはやはり京都の明德小学校に転勤になっている。

彼の実践はこの2つの小学校での仕事が次第に所謂“20坪の教室”や1つの学校内での実践から地域へと向い、第1巻後半に集められた“白書運動”へと移行しはじめるのである。この頃から中村氏の実践の方向は“生活綴方”の影響から脱して、むしろ“毛沢東”に学んだものに依拠しはじめるのである。しかも、この当時の実践はやはりその当時のわがくにの理論的情況であった“国民教育”論の影響を強くうけているということができるのである。——そのこと、つまり、国民教育の国民とか父母とかいわれる人びとのなかの部落大衆を学校からのぞくように見ながら、一方で子ども一方で部落大衆、この両者の中間に“教育実践”が成立するというように考えている実践——

その不十分さというか誤りというか、そのことが気になりながら、その実践をどこでどうおぎなうべきかが問われつづけることになる。

その間の発生源は1つは“田中子ども会”と著者との出会いであり、その影響が明德小学校での“子ども会の発足”となってあらわれてくるのである。

明德小学校を離れたあと、親たちからの手紙がたくさんよせられたようである。その1部がしまいの方にのせてある。これは、ある1人の母親の詩である。

早いなあ。

先生にはじめておうてから、  
もう二年たってしもうたん？  
うそみたいやなあ。

あんまりたのしかったんで、  
しらんまにすぎてしもうたんやなあ。

千波ちゃんたら、日記に

「先生なんか死んじゃえ」  
なんて書いたことあったなあ。

先生に会ったら、

「この娘に、死んでまえて、書かれましてね、  
へへへ」

と頭をかいたはったえ。

長いこと、おかあちゃんが入院してたら、よく見舞に来てくれはったえ。

「学校はじまっても退院でけへんかったら、娘をつれて帰って、いっしょに学校へ通いませ」

って、ゆうてくれはったえ。

うれしかった。

平田君のおばあちゃんはな。

内職してはたらな、

いっしょに手伝いながら話してくれはったゆうて、

泣いて喜んだはったえ。

先生は、ようとびまわらはったなあ。

あっちに病気の子があつたらのぞきにいき、

こっちに困ってるおかあちゃんがあつたら相談相手にとんでいき、

社会の勉強やゆうては、

片丘君のおじいさんや大石君のおじいさんを探ね、  
ようきばらはったな。  
おっ、そうや。  
先生、かぜひかはって、  
声でえへんさかい、マイクで授業してはったな。

参観日のおき、  
「先生、月給安いのに、えらいむりしたな」  
て、みんなで大笑いしたな。

かざり気のない先生やった。  
だれとも話してくれはった。  
あんたらだけでなしに  
私らにもいろいろはなしてくれはったな。  
先生は、  
「人間が生きていくって、たいへんやなあ」  
て、よういわはったな。  
先生のまいてくれた種やったな。  
いつでも、忘れへんでえ。

先生も、  
岩倉のこと、忘れんといてや。  
子どもたちのことも、  
おとうちゃん、おかあちゃんのこと、  
おじいちゃん、おばあちゃんのこと  
みんな、みんな、おぼえておいてや。  
ほんまに、おおきに。 (矢川よし子)

この母親の目には、著者の中村先生と戦前に岩手県で活躍していた宮沢賢治とが二重に反照しあっていたと思われる。私が中村拡三著作集Iを読み終えて感ずるのは、それが1つである。だからこの節の小みだしに「教育実践とヒューマニズム」としたのである。勿論、私自身は中村氏と宮沢賢治を重ねさせるのは間違いだと思う。宮沢のそれに比して中村のよりたくましいヒューマニズムだと思う。しかし、実践が教室に学校に限定されているかぎりでは、やはり“ヒューマニズム”に終る危険を蔵しているといわれねばならないだろう。その限界をのりこえてゆくのが次の子ども会の組織の仕事である。

## 2. 階級と教育との結合の門 ——第2巻——

海老原治善編著『昭和教育史への証言』で中村拡三氏との対談がとりあげられている。その章の表題は、部落解放運動と教育——地域・子ども会——となっている。その中で中村氏は、著作集第2巻の意味とでもいうべきことを語っている。ちょっと長くなるが必要なところを引用しよう。

「……当時勤評闘争中でした。奈良は組織が弱く十分なたたかいはできませんでした。ところが京都の田中子ども会のたたかいを新聞で読んでびっくりしたんです。ぎょうてんしましたな。子どもたちが3日間、同盟休校し、知事交渉から市長、教育長交渉までやったんですね。それが全部ではありませんが、その力で、勤評を阻止したわけでしょう。

田中の子どもたちの動き方に見られる人間形成は、ほくのやっている生活綴方教育方法とはどうも違うんじゃないか、と思うようになりました。子ども会が大切なんだとそのときから考え始めたわけです。子ども会づくりをはじめてみました。しかし志が果たせないうちに、京都に転勤になったのです。」

第1巻に収められた、京都の有斉小学校における実践記録に述べられている事実がそれに続いて語られるのであるが、中村氏の父母への手紙をA君の母親が読めないことが報告されたのをきっかけに、B子たちがA君のうちへ手紙をとどけ、それをB子が読んであげることになる。そして、B子がA君の家へ行ってA君のお兄さんの靴直しの労働で鍛えられた手を見、B子のおじいさんの手を思い出し、あの兄さんがいる限りはA君はきっといい子になるだろうと確認した話を思い起しながら、話としては美談であるが、でもやっぱりこれではだめだということを確認する。そして「それはそれで意味がある。また、こういうグループ学習などを通じて指導してゆけば、いわゆる学力も上がる。でもしかし、部落の子のもっている荒けずりな、野生的なたくましさ、こういう教育のなかでけずりとられ、きれいにされて上がっていく。こういうことになってしまうんだな。

これでは解放にならない。部落の子の解放は、荒けずりでもいいから、そのまま大きくふとらせて、解放のたたかいに立ち上げられるような子ども

に育てなければならない。」

このような志向から「子ども会」が育てられ、そこから学校の教室での教育の「差別性」が指摘され、改められてゆく道を探しはじめねばならないと、考えられてくるのである。

ひとたび、解放運動に結集した組織と結合して、部落に子ども会ができあがり、そこから学校教育を見直すと、学校はむしろ、解放のエネルギーをおしつぶす重大な過誤を犯してきたことが明確になる。と同時に、「水平社」の運動が発達して以来、わがくにの戦前の「新教」「教労」「全農」などの運動と結合しておびただしいまでの「無産少年団」「ピオニール」が全国各地にぞくぞくと生れ、たたかっていた歴史と結合せざるを得ないことに気づかれるのである。

著者中村氏は、子ども会の指導に全力を投入し始めるが、その頃にやがて体をこわし、医者に休養を命ぜられ、それが1つのきっかけとなって「無産少年団」「ピオニール」史の資料の掘りおこしに手をつけることになる。この第2巻の重要な部分が、これら資料の整理を基礎に綴られた「II子ども会の歴史と活動」である。

そして、戦前のたたかいと戦後のたたかいとを結びつける目的意識的な子ども会活動の典型的な事例を、1つは京都の「田中子ども会」に求め、他の1つは広島島の尾の道にある北久保の「めだか子ども会」に求めて整理したのが「6部落子ども会の伝統」である。

戦前の天皇制下における小作農民と労働者の階級闘争は極めてきびしいものであった。そのきびしさに耐えてたたかった大人たちに、少年少女たちが協同してたたかったのが少年少女水平社であり、無産少年団・ピオニールであった。戦後のわがくにの労働者のたたかいは、意識的にこの伝統をうけつづけることをおこたってしまった。どちらかという、子どもの教育の権利を個人主義的自由主義の立場でうけとめて、それを「憲法・教育基本法」の立場として固定的にうけとめる傾向にかたむき、労働者階級の立場からの教育権という発想がきわめて弱い。それとは対照的に「全水」以来の部落解放の立場は、部落子ども会にうけつがれているし、そこからわがくにの労働者階級の教育観を復活強化してゆくきっかけがつかみとられ

るのではないかと思われる。おそらくわがくにの労働者階級が、階級的な視点に立って教育を考えたときには、地域に労働者階級のための子ども会が組織されなければならなくなるのである。「学童保育」などには実はその萌芽があるのであるが、それが十分に理論的に——ということは労働者階級の立場から整理されていないのが実情なのである。われわれは、中村三著集第2巻の意味をここに見出さねばならない。

### 3. 解放教育内容の創造 ——第3巻——

著者は第3巻の解説のはじめに、この巻の性格を「ひとくちについて、解放教育と集団主義をめぐる教育理論」の書といていいであろうと述べている。第1巻、第2巻とみてきて気づくのは、この2巻はいずれも中村氏の実践の記録が多く集められ、その実践を導いた理論は絶えず顔を出しながら必ずしもまとまった形では明かにされていない。それを補強するような形で第3巻の前半は、教育理論がどのように組み立てられていったかがわかるように編成されている。そして後半は、部落解放運動の急激な発展に支えられて、差別的な学校教育の体質を運動の側からとらえ直し、解放教育読本、そこから教育内容の変革を志向してはじめられた『にんげん』の編集と、その大阪府における無償配布の獲得に至る実践の理論的裏づけ作業となっている。

「20坪の教室」の中で教師の各人が教科書の内容を批判し、教材の大巾な取捨選択をしたりプリントをつくって別の教材を「なげ入れたり」することが、教育内容の自主編成だといわれてきた。それはけっしてわるいことではない。しかし、部落問題の解決が「国の責務であり緊急の国民的課題」であるという認識に立てば、文部省は先づ第1に、部落解放同盟に相談して、部落問題を国民に徹底的にわからせてゆくための資料の作成に乗り出さねばならない筈である。それが民主的編成ということである。それをやってきたのがむしろ大阪における『にんげん』の編成だったのである。

著者は『にんげん』の構成という1節で「全体の構想・各冊の構成については多くの問題があるが、とくに次の3点だけは明かにしておきたい」

と述べて、

第1は、部落問題を子どもの発達段階に応じて、いつ取りあげるかという問題である。

第2は、部落問題の全教科・領域の位置づけの問題である。

第3は、部落問題と関係の深い諸問題——労働・平和の問題、民族差別や沖縄差別についての問題である。

この3点について著者は夫々にくわしく意見を述べているが、これらの問題は、何れも「民主的な教育内容の編成」を課題としてもつ労働者階級の内容編成上の問題なのである。

著者はまた、引き続いて、解放の学力とは何かを明かにしてゆくこと、並びに、部落解放総合10

ヶ年計画に教育をどのように位置づけるべきであるか、そのようなことをとくに理論解明の重要課題であると指摘している。これら課題はまだすっきりとして解決をみているとはいえない問題であって、多くの人たちの協力を得て、やがて間もなく解明されてゆくであろう。このために著者中村氏の果さねばならない役割も大きくなる一方であるが、おそらくその任に耐えてくれるであろう期待をこめて、この本の紹介を終わりたいと思う。

実践の重みと、理論の重要性をつくづくと考えさせられる極めて重要な大著である。それがこのようにしてまとめられたことを心から喜びたいと思う。と同時に、今後の著者のさらなる健闘を祈る次第である。(1973年10月刊、各巻とも2,800円)